

作物名：ねぎ  
病害虫名：黒斑病（病原：*Alternaria porri*）

### 1 被害の特徴と診断のポイント

- ・主に葉に発病し、紡錘形の病斑を形成する。病斑は同心輪紋状で、病斑上には黒いスス（分生子）を生じる。病徴が進むと病斑から上部が枯れたり、上下に枯死して葉が折れ曲がる。
- ・症状が似ている病害として葉枯病（斑点病斑）があるが、肉眼観察による識別は困難である。ほ場によっては混発している場合もあるため、正確な診断には、検鏡により分生子の形状を観察する。黒斑病では長棍棒状の分生子が見え、葉枯病では俵型の分生子が見える。



写真1 葉身上の病斑

### 2 伝染源・伝染方法

- ・被害植物上で菌糸や分生子の形で越冬し、翌年の第一次伝染源となる。病斑部に形成された分生子が風などによって飛散し、二次伝染を繰り返す。

### 3 発病しやすい条件

- ・本病菌は糸状菌の一種で不完全菌類に属し、分生子を形成する。分生子の発芽適温は 24～27℃、菌糸の生育適温は 25～27℃で、中～高温期の多湿条件で発生が多くなる。気温 12～13℃以下ではほとんど感染しない。
- ・発生のピークは梅雨期と秋雨期で、盛夏期は停滞する。秋冬作型では、生育中期～後期まで発生する。
- ・本病菌の感染から発病までの潜伏期間は 1～4 日である。
- ・本病菌は糸状菌の一種でべん毛菌類に属し、分生子と卵胞子を形成する。分生子の発芽適温は約 10℃、形成適温は 13～15℃で、湿度は 90%以上のときによく形成される。卵胞子は、一度低温に遭ったのちに 20～25℃にすると、よく発芽する。
- ・多湿条件を好み、平均気温 15～20℃で降雨が続く場合に発生が多くなるため、梅雨期や秋雨期には多発しやすい。
- ・特に秋季に発病した株が冬を越すと春季に多発することが多い。

### 4 防除方法

- ・多湿条件で発生しやすいので、ほ場排水及び通風を良くする。
- ・多発してからでは薬剤防除の効果が得られ難いので、発生初期の防除を心がける。
- ・被害残さは伝染源となるため、ほ場外に持ち出して土中深くに埋設するなど適切に処分する。
- ・肥料不足は発生を助長するので、適正な肥培管理により、健全な生育を確保する。

### 5 出典

#### (1) 参考文献

- ・日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- ・農業総覧原色病害虫診断防除編3-②（農文協）
- ・農業総覧病害虫防除・資材編4（農文協）

#### (2) 写真

- ・宮城県病害虫防除所撮影

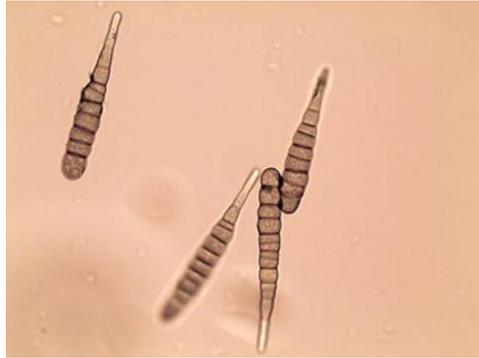


写真2 黒斑病菌の分生子

(令和5年9月改訂)